

追手門学院学生が希望する 職業・職種に関する調査

藤 田 正

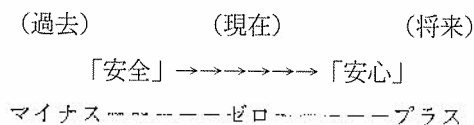
I. 目 的

本論の目的は、追手門学院大学生がどのような職業・職種を希望しているか、を調査し、どのような仕事に就いて働きたいと思っているのか、を考えることにある。

いかなる仕事も市場のニーズを満たす技術を提供するという関係で成立する。牧野昇(1978)は、それまでのコーリン・クラークによる一次・二次・三次という産業分類の限界を指摘し、新たに「ニーズ(市場)の農業・物材・サービス・情報」の4分類と「シーズ(技術)の素形、加工、システム」の3分類を組み合わせた『4・3方式産業分類法』を提案し、「一見不動に見える産業分類も、時の流れに応じて変わっていく」、それまで使用してきた分類法から外れ、「その他産業として公的な統計分類から外れている産業…分類不明産業が伸びる」と主張している。このニーズ(市場)×シーズ(技術)の組み合わせの理解は就職を考える学生にとって重要である。市場ニーズの見定めをしつつ、いかなるシーズ(技術)を学習・獲得すべきかの決定に役立つからである。が、牧野の分類は1980年前後の時代を反映しており、現在の重要課題である「安全・安心」に関わ

るシーズ（技術）の位置付けが不鮮明である。そこで本調査ではこのシーズ（技術）を加味した枠組みで調査を行う。

では「安全＝安心」と考えていいのだろうか。「今、危険であれば将来は安心できない」が、「今、安全だから将来も安心」とは言い切れない。このことが示すのは「安全＝安心」ではなく、「安全→安心」である。つまり、「安全」と「安心」の間には「現在→将来」という時間軸がある。そこで、「安全」を（過去から現在）、「安心」を（現在から将来）とした上で、その課題を「安全…マイナスからゼロ」、「安心…ゼロからプラス」と位置づけて考える。



この枠組みで「安全」課題を考えると、過去の不安全（危険）事例の分析とそこで得た教訓を活かす活動が不可欠となる。が、私自身被災者となった阪神・淡路大震災の救命救急活動では関東大震災と同じ、もしくはそれ以下の行政対応がなされたという批判が起こった。つまり、過去の教訓は活かされなかった。しかし、「危険・不安」の中で生活を送る被災者はボランティアの支援を受けながら家族・近隣・地域との協力体制を作り、救命救急活動に従事した。このことが示すのは緊急場面における身近な集団の重要性であり、これがその後の復旧・復興活動に結びついたのだが、ここにとどまらず阪神・淡路大震災の被災者の多くは後に起こった地震・豪雨などの天災に遭った地域への支援を行っている。その反省会の中で、ボランティアとして訪れ、「神戸から来ました」と自己紹介すると、被災状況が悲惨であるにも関わらず被災者の方々が「ホッとした表情」を見せたという意見があった。が、これは悲惨な自然・環境

を除外して、心理的次元のみで「安心感」の確保が出来ることを示しているのではない。というのは危険な状態から少しでも安全な状態へと変わる過程での「共に活動する」人々との継続的交流が「安心感」を生み出したのである。つまり、「安心感」は「安全」確認の継続性の上に成立している（藤田1996）。このことは「安全と安心」が異なる構造を持つことを示すが、「安心感」を感じるにはそれを担う人々との信頼を紡ぎだす継続的な協働性がある。が、大規模災害の場合、この協働性の全てを個々人で担うことには限界がある。つまり、組織的な対応が不可欠である。ここから「不安の時代」と言われる現代社会での安心感確保を担う産業が成立すると考え、本調査では「継続・安心」シーズを設定したのだが、いうまでもなく牧野のいう「素形、加工、システム」の各シーズは「安全」でなければならない。つまり、シーズ軸（技術）を以下のように位置づけたのだが、追手門学院大学生はどのようにとらえているのだろうか。

安全・安心：……………安全……………	…安心…
シーズ軸　：素形、加工、システム	継続
（牧野の分類）	（付加分類）

II. 方　　法

1) 職業分類表の作成

牧野（1978）が提案したニーズ（市場）とシーズ（技術）の組み合わせによる産業分類を改変（シーズに継続・安心を付加）し、各4つの縦軸ニーズ（市場）、横軸のシーズ（技術）を組み合わせた16分類を作り、牧野（1978）を参考にしつつ、代表的な具体的職業を各セルに配置する。なお、代表的な具体的職業の設定については事前に、本調査の趣旨を説明した4名の学

生と討論し、その意見を採り入れたが、このことを行った理由は、1980年前後の職業と現代の職業とでは、その具体性に差があると考えたからである。

2) 調査方法

- ・『産業心理学』受講者(167名)に配付して、その場で回収した。
- ・調査の趣旨を説明し、「働きたい、興味ある」と思う職業を三位まで選び、その理由を書くことを求めた。

Ⅲ. 結 果

本調査は追手門学院大学生が希望する職業の分布を、ニーズ(市場)とシーズ(技術)を組み合わせた16分類で調査した。

- 1) 回収した調査用紙は167人分であるが、3人が未選択、10人がニーズ部分のみ選択していたため、分析対象としたのは154人分である。
- 2) まず、調査用紙に記入された理由をみると、「面白そう、儲かる、受ける、小さい時からの憧れ、親の意見」といった職業への全体印象が多かった。ごく一部、選択した職業とニーズ(市場)とシーズ(技術)の組み合わせニーズにズレがある回答があったが、この場合は選択した職業を回答とした。その理由は、受講生にとって、ニーズ(市場)とシーズ(技術)の組み合わせよりも職業名により具体性があり、それにより選択したと考えたからである。

表1 産業心理学受講者の希望する職業の分布

(シーズ・ 技術軸)→	安全			安心
	(素形) 〈137, 29.7%〉	(加工) 〈165, 35.7%〉	(システム) 〈111, 24.0%〉	(継続) 〈49, 10.6%〉
(情報)	*スペシャリスト *弁護士 *デザイナー 会計士 情報ソフト 携帯ソフト	*病院 *学校 *放送出版 人材養成 パソコン指導 操作指導	*政府公共団体 *総合商社 *情報産業 組織設計 プログラマー 名簿ビジネス	資格登録 人材派遣 「夢」ビジネス コンサルタント ソフト管理 名簿プール
(ニーズ・ 市場) 軸	〈185, 40.0%〉	〈38・16・13= 67〉 [55]	〈10・21・15= 46〉 [66]	〈30・13・11=54〉 [44]
	*専門店 *個人サービス *電力・ガス・石油 貯金 オーダー 交通 メタボ等診断 ホテル・宿泊	*レストラン *百貨店スーパー 電気店・スタンド *金融保険 店舗販売 運輸 健康指導 マナー訓練	*航空ライン *通信ネットワーク エネルギーライン 投資情報 *物流サービス 交通情報 個人・ライフ相談 サービスネット	ブランド ネット管理 安全維持 証券等管理 顧客化・外商 交通情報管理 生活サポート クレーム分析
	〈155, 33.5%〉	〈10・10・15= 35〉 [46]	〈27・25・20= 72〉 [55]	〈7・18・10=35〉 [37]
(物材)	*金属・化学・窯業 繊維 食品(水等) 宇宙空間 身体 土地 リサイクル資源	*機械 *衣料 *加工食品 ロケット 医療品 不動産 活用技術	*プラント・ゼネコン 貸衣装 フードデザイン *宇宙航空 医療ネット 地盤調査 リサイクルネット	機械リース 衣装相談 食品、水備蓄 宇宙ルール 防災・予防 不動産管理 Re. 技術備蓄
	〈70, 15, 2%〉	〈3・8・6=17〉 [21]	〈9・7・9=25〉 [25]	〈5・6・10=21〉 [17]
(農林 水産業)	*農業 *漁業 自然環境 食材再発見	*酪農 *加工船団 環境保全 新食材加工	*システム農業 *海洋牧場 「むら」起こし 自然と人間ネット	協同組合 (魚)市場 資源維持 食育
	〈52, 11, 3%〉	〈5・3・10=18〉 [16]	〈4・9・9=22〉 [19]	〈0・1・0=1〉 [13]
				〈1・6・4=11〉 [6]

注) *は牧野のあげた職業。結果表示: 〈一位・二位・三位=合計〉。外枠の数字はニーズ、シーズごとの合計と%。[] は周辺度数から求めた理論値(四捨五入してある)。

IV. 考 察

牧野（1978）のあげた職業に付加した職業群の中から第一希望から第三希望までの3つの職業を154人の受講生が答えた。つまり、選択された個別職業延べ数は 3×154 （人）の462となるが、例えば、ニーズ・情報の選択数は185人で分析対象学生数154人を越えている。これは31人の学生がニーズ・情報に配置された職業を複数選択したためである。このような重複性があることに留意しつつ検討をする。

①、167人中154人（92.2%）が希望する職業をあげている。これは受講生が卒業後の就職について彼等なりの目標や高い関心を持っていることを示している。

②、ではどのような関心を持っているのだろうか。まずニーズ（市場）軸でみると情報、（185/462 40.0%）、サービス（33.5%）、物材（15.2%）、農林水鉱業（11.3%）の順位であり、ニーズ・情報+サービス、で選択数の73.5%を占める。この結果は現代日本の就業構造に近い。つまり、受講生の結果はニーズ（市場）軸での現代の産業動向を反映している。次に、分析対象学生数（154人）を分母として検討すると、ニーズ（市場）軸では（情報185, 120.1%）、（サービス155, 100.6%）でこの二つは100%を超える。つまり、ほぼ全員の受講生が強弱の差はあっても（情報・サービス）職業への関心を持っているといえる。

③、では、就職に際して必要な技術・能力などを示すシーズ（技術）軸ではどうだろうか。（加工）（素形）（システム）が高く（継続）は低く、その比はほぼ6：7：5：2である。そして、分析対象学生数（154人）を分母とすると、（加工165, 107.1%）が100%を超え、（素形137, 89.0%）、（システム111, 72.1%）はかなり高い。（継続49, 31.8%）は相対的に低いとはいえ約1/3が関心を持っている。この軸についてのわが国全体の分布データを入手していないため、受講生の分布が全体動向を反映しているかどうか

かの判断はできないが、このシーズ（技術）軸が示す技術・能力こそが就職の決め手となることはいうまでもない。このことは人材派遣会社の業務をみれば明らかであるが、就職指導などではその具体的内容の丹念なデータ・ベース化が必要である。

④、ここまではニーズ（市場）軸とシーズ（技術）軸を分離して検討したが、この両者を組み合わせてみよう。ニーズ（市場）軸で多いのが（情報）、（サービス）で、シーズ（技術）軸では（加工）、（素形）、（システム）だから、これらを組み合わせた6つのセルが多いと予想される。事実、16セル中の上位6位までをこれらが占めている。つまり、ごく大まかにいえば、情報×素形…スペシャリスト等、情報×システム…公共団体等、サービス×加工…レストラン等、情報×加工…学校等、サービス×素形…専門店等、サービス×システム…航空ライン等、への関心が高いといえ、情報×素形…スペシャリスト等、情報×システム…公共団体等、サービス×加工・安全…レストラン等、では一位希望が最も多い。これらは日頃の受講生との会話でもしばしば登場する職業群であり、これらにはかなり明確な職業イメージや構成ニーズ、シーズの把握があると思われる。

⑤、次に表1の周辺度数から算出した理論値（462×ニーズ軸の率×シーズ軸の率）と選択数の比較をしてみよう。まず選択数の多い6セルの内の3つのセル、情報×素形、情報×システム、サービス×加工は、理論値よりも選択数が多く、先に述べたスペシャリスト・公共団体・レストランなどへの指向性がここにも現れている。ほぼ理論値に近いのは、サービス×システム…航空ライン等で、情報×加工…学校等、サービス×素形…専門店等は理論値よりも低い。この低さが示すのはニーズ（市場）×シーズ（技術）の組み合わせがその職業希望に結び付いていないことを示している。その理由はここからは分らないが、現実の職業選択場面で一部の受講生に忌避傾向の見られる職業と考えられる。

⑥、ここで牧野の分類での、残りの6セルをみてみよう。ニーズ（市

場)×シーズ(技術)の組み合わせはニーズ(物材, 農林水産業)×シーズ(素形, 加工, システム)であるが, 農林水産業×システムは1人と少なく, 理論値とのズレが大きい, 残りの5セルは20人前後が選択しており, さらに理論値とのズレは小さい。農林水産業×システムの少なさが示すのは, これらの職業システムについての現場知識のなさが反映していると考えられるが, 残りの5セル, 物材×素形…金属・繊維等, 物材×加工…機械・衣料等, 物材×システム…ゼネコンなど, 農林水産業×素形…農業等, 農林水産業×加工…酪農, はほぼ理論値に近いことから, ニーズ(市場)×シーズ(技術)の組み合わせが職業選択に結び付いていると考えられる。つまり, 選択数は少ないが明確なイメージがそこにはあると考えられる。

⑦, 次に本研究で新たに付け加えた安心シーズ(継続)をみてみよう。選択数は他のシーズに比べて最も少ない。このことはシーズ・継続における提供技術が受講生にとって分かりにくいことを示している。この傾向はニーズ軸の, 情報…人材派遣, サービス…証券等管理等, 物材…機械リース等に見られるが, ニーズ・農林水産業×シーズ・継続…組合等, の選択数はニーズ・農林水産業×シーズ・システム…システム農業等, よりも多い。そして, 理論値との比較でみると, ニーズ・農林水産業では選択数が理論値よりもかなり多く, ニーズ・物材で同じとなり, ニーズ・情報, サービスでは少なくなる。

ここで産業の発展経緯を第一次(農林水産業)→第二次(物材)→第三次(サービス, 情報)とすれば, 第一次(農林水産業)での理論値を超える選択傾向が第三次(サービス, 情報)に向けて見られなくなるということは新しい安心シーズ(継続)の定着がより基礎的な産業で, 現在起こっているのではないかということを伺わせる。

V. ま と め

追手門学院大学生のほぼ全てが希望職業をあげており、さらにニーズ（市場）把握はかなり正確で現在の職業事情を反映していた。が、獲得すべきシーズ（技術）には、ことに現代日本の重要課題「安全・安心」のシーズ・安心に関する選択数は少ない。これはこの分野の職業がなお未開拓であることを反映しているが、視点を変えれば創業・起業への注目ポイントとなる。

また、ニーズ・農林水産業×シーズ・システムが示すシステム農業、海洋牧場などを選んだ学生はわずか1人である。この組み合わせの職業を選択するには、自然科学、地域学、などに関わる知識、さらには「農業体験」などの自然に触れる体験とそれが持つ社会貢献の意味理解が不可欠であるが、情報、サービスは、農林水産業、物材の上に成り立っている。この視点からいえば、文科系受講生に対して「米作り、モノ作り」といった体験の提供が必要であろうが、最も重要なことはシーズ（技術）の丹念な収集と体系化であろう。

参 考 文 献

- 牧野昇 1978 『未来産業を見誤っていないか』 東洋経済新報社
藤田正 1996 『私論 被災者の心理』 ナカニシヤ